

もういっしょに遊べないの……



見えないもう一本の糸が  
幼い命を結んでいた。

# 誘拐報道

ゆうかいほうどう

伊藤俊也監督作品

東映株式会社  
日本テレビ放送網株式会社  
提携作品  
読売新聞大阪本社  
発行30周年記念  
原作・読売新聞  
大阪本社社会部  
脚本・松田寛夫  
撮影・姫田真左久  
（カラー）作

萩原健一  
小柳ルミ子  
秋吉久美子  
藤合美和子  
高沢順子  
賀原夏子  
池波志乃  
松尾嘉代  
伊東四朗  
宅麻伸  
高橋かおり  
和田求由  
岡本富士太  
三波伸介  
大和田伸也  
湯原昌幸  
小倉一郎  
宮内洋  
中尾彬  
なべおさみ  
藤巻潤  
平幹二郎  
菅原文太  
丹波哲郎

## 《かいせつ》

子どもは泣いていませんか！ 無事なんですわ！

——冬の日の午後、少年が学校の帰り道で誘拐された。その瞬間から被害者の父母、犯人とその妻子、そして捜査陣や報道陣は、それぞれどのような行動をしたのか。

昭和55年1月、兵庫県・宝塚市で現実に行った小学生誘拐事件を、新聞記者たちの取材活動を通して書き綴ったドキュメント「誘拐報道」（新潮社刊）。これが映画の原作である。

誘拐——、それは犯罪の中でも最も卑劣冷酷にして憎むべきもの。誘拐された人間の命は全く保証されず、むしろ生存の確認さえ不可能だ。映画は、ひとつの幼い生命とその救出をめぐる、胸をえぐるような衝撃の展開を見せる。

愛する子供を奪われて、恐怖と不安にさいなまれる若い父母。誘拐した子どもを車のトランクに入れて転々とさまよう犯人の動揺と焦り。

そして犯人の妻と子の無惨な悲しみ。さらには犯人逮捕に全力を投入する県警捜査陣と、報道協定というウクの中でスクープを狙う取材陣。この作品は、これら数多くの人間たちが、のたうち、傷つきながらも、力の限り努力した姿を、危機感がギリギリきしむ恐るべき事件のなかに描き切って、誘拐事件の全容に迫ると共に、社会的に広がりを持った人間ドラマとして熱くうたいあげている。

「原作を読んで映画化を心に決めたときから、犯人像に強い興味を持った。」という伊藤俊也監督は、「犬神の悪霊」以来実に5年ぶりのメガホン。持前の鋭いリアリズムで全篇、ゆるぎない緊迫感でつらぬいている。

処女作「さそり」から丁度10年、この間に磨きあげた力量のすべてを叩き込んだ。映画の後半、犯人が子どもに寄せてしまう思いがけない情愛、そして、その子どもが、自分の娘と同級生という衝撃的な事実。ラストまで生死の確認がつかめない恐怖、サスペンスが見る者の心をしめあげ、スリリングに盛りあげる。伊藤演出の独壇場だ。

なお、人間ドラマとしての感動を盛りあげるべく出演者もユニークかつ多彩である。

人の良さと気の弱さがわざわいして店をのつとられ、窮余の一策にと誘拐を計画する男に萩原健一。夫の欠落部分を補ってけなげに生きる妻に小柳ルミ子。恐怖のどん底に落される夫婦に岡本富士太、秋吉久美子。事件を追うなかで成長してゆく若き新聞記者に宅麻伸、その恋人に藤谷美和子。その上司に三波伸介、丹波哲郎等。捜査に命をかける平幹二郎、藤巻潤、伊東四朗。子役の和田求由、高橋かおりほか映画演劇テレビ界から多数ベテラン陣が参加している。

'82秋の映画界に大きな波紋を投じる一篇である。

## 《プロダクション・ノート》

●生半可な一般公募では成果は期待できない……。日本映画界を代表する実力派演技陣がズバリと顔を揃えるこの映画で、何といてもキャストिंगのハイライトは、準主役に該当する二人の子供だ。伊藤監督の脳裏には、誘拐される男の子には、「汚れなき悪戯」のマルセリーノ坊や、同級生の犯人の娘には、「禁じられた遊び」の少女ポーレットを越えるイメージを持った子役を……という構想が当初からあった。かくして監督は、ロケハンの段階から自らの足で子役探しを始めた。大阪、京都、名古屋の各地で面接した子供は延べ5千人。その結果、小学校1年生の和田求由君と、幼稚園の高橋かおりちゃんに白羽の矢が立った。苦勞の成果は、見事に画面に表われた。演技に関しては、二人ともズブの素人であるにも拘わらず、並みいる演技者たちに伍して、その存在感で一歩も引かぬ名演を見せてくれている。

●映画出演は、「魔性の夏」以来ほぼ1年ぶりの萩原健一。初の誘拐犯人役は、イメージダウンにつながるおそれさえあるのに、あえて新境地に挑戦した。74キロあった体重を映画の出演のために2ヵ月かけて64キロに減量し、誘拐犯罪を実行に移すことによって、殺気立ち、しだいに追いつめられてゆく鮮烈な犯人像を創造した。特に、手持ちの金が底をついて、被害者に電話をかけるうちに10円玉さえなくなるくぐりは圧巻！一枚の10円玉に託して見事に犯人の心理と状況を見る者の心に伝わせるショーケンが、すごい。

●撮影所に、新聞社が移転してきた!? 「誘拐報道」のビッグなスケールを象徴するのは、東映東撮第5ステージをはみ出さんばかりにして建てられた、読売新聞大阪本社編集局の大セットである。今すぐにも、どこかの新聞社が引越して来ても、充分機能が果たせそうな臨場感と大きさ。それもそのはず、劇中で使われる新聞と号外は、すべて大阪本社の特別協力で作製されたホンモノ。小道具に至るまで現実に使用されているものを借り、手抜きのないリアリティが保証された。



謎の空白部分!!

ほんとうの恐怖は報道されていなかった!

9月25日(星)ロードショー

新宿歌舞伎町

ミラノ座 (202) 1189

渋谷東急文化会館1F

パンテオン (407) 7219

★特別鑑賞券 ¥1200 (当日一般1500円/学生1300円/の処) 好評発売中!

■上映時間 連日 11:00 1:20 4:00 6:40